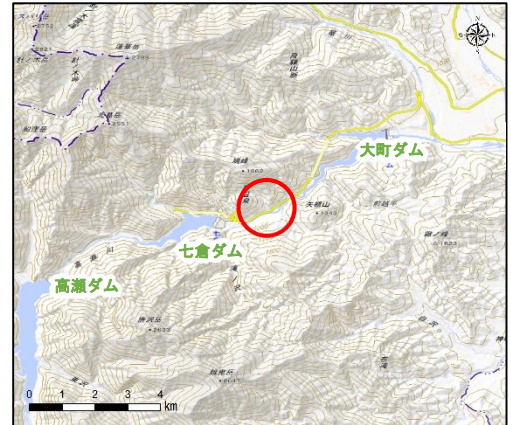


4.3 昭和44年（1969）の高瀬川災害 （位置 No.⑳）	
発生年月日	昭和44年（1969）8月11日
発生地点	長野県大町市平高瀬入
緯度・経度	36.492530, 137.747092
発生誘因	降雨
天然ダムの形成	○有 ・ 無
被害状況	人的被害：死者・行方不明3人（大町市） 家屋被害：葛温泉の旅館3軒、他の詳細は不明
災害概要	停滞した梅雨前線は、大町測候所で日雨量237mmを記録しました。 この影響で洪水、土砂災害が発生し、大町市では死者・行方不明3人、軽傷3人、住家の全半壊等20、床上・床下浸水1034棟の被害が発生し、災害救助法が適用されました。高瀬川流域の被害も甚大で、特に高瀬渓谷の葛温泉では3軒の旅館の全てが流失、埋没、土砂流入などの被害を受けた他、多くの観光客や登山者が高瀬渓谷で孤立しました。



位置図

国土地理院「標準地図」に加筆

◎ 高瀬川災害

昭和44年（1969）8月上旬、前線の影響を受け長野県はにわか雨が降りやすい状況であり、特に県の北部は、7日以後は連日未明から明け方にかけて、強いにわか雨が降りました。11日もあたかも定期便のように明け方近くから、県の北西部で強い雨が降り出し、雷を伴うようになりました。

前線の本州中部停滞による長野県下の豪雨は、特に高瀬川、穂高川流域に集中し、当該水系は異常な出水となりました。

長野地方気象台は9日より11日まで繰り返し大雨注意報等を発表し、河川の氾濫や土砂災害への注意を呼びかけました。

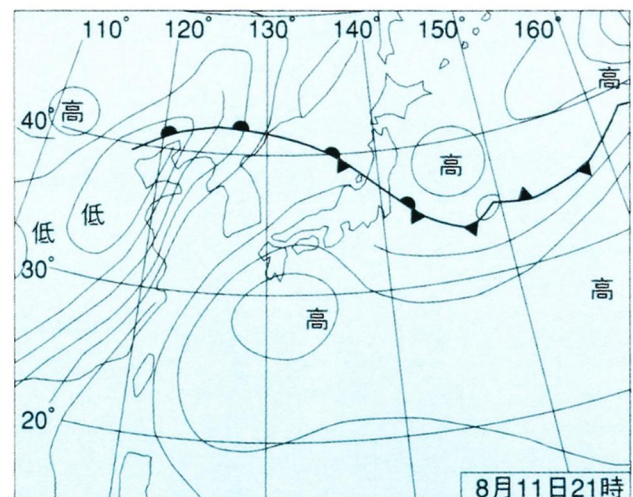


図4.8 昭和44年（1969）8月11日の天気図
（松本砂防工事事務所，1998）

◎ 被害状況

高瀬川上流では、南沢岳(2625m)東麓の急峻な谷である濁沢が崩壊し、崩落土砂が高瀬川を一時的に堰き止め、その後決壊して一気に土石流となりました。

これらの影響で、葛温泉とその奥地、濁山頂、高瀬川第五発電所において合計約 300 人が孤立し、自衛隊や民間航空のヘリコプターによって救出される事態となりました（写真 4. 11、4. 12）。

また、下流の葛温泉では旅館の建物 3 棟が流失、付近は土石流で埋め尽くされました（写真 4. 14～4. 18）。

また、長野地方气象台（1969）によると、松本測候所が被害調査を行っており、高瀬川流域について「この流域が今回の大雨による被害が最も大きく、堤防・護岸などの決壊、破損は大きなものだけでも 8 か所におよび、小さな沢崩れなどを

合わせると数えきれない位である。これらのうち最も大きいのは大町市大新田地区と、松川町北細野地区の堤防決壊で、前者は堤防約 300m 位が決壊、堤防の傍の工場一棟が跡かたもなく流失したが、幸い地盤が高かったので付近には溢水せず被害を最小限に食い止めた。当時の高水位は危険水位を 50 cm 越えた 3m で、決壊時刻は午後 5 時ごろの様様である。

後者は松川中学校の裏の堤防が約 70～80m 欠損、さらにその下流約 2 km の処で 100～150m にわたって決壊し、この部分より高瀬川の濁流が土場、島新田地区に向かって押し寄せ、その一部は大系線を越えたため大系線は不通になった。この濁流はさらに南下し、青木花見地区を^{おお}掩った。」と記録されています。



写真 4. 11 堰堤の上に文字を書き救出を待つ人々
(大町市蔵)



写真 4. 12 救出作業に従事した自衛隊等のヘリ
(大町市蔵)

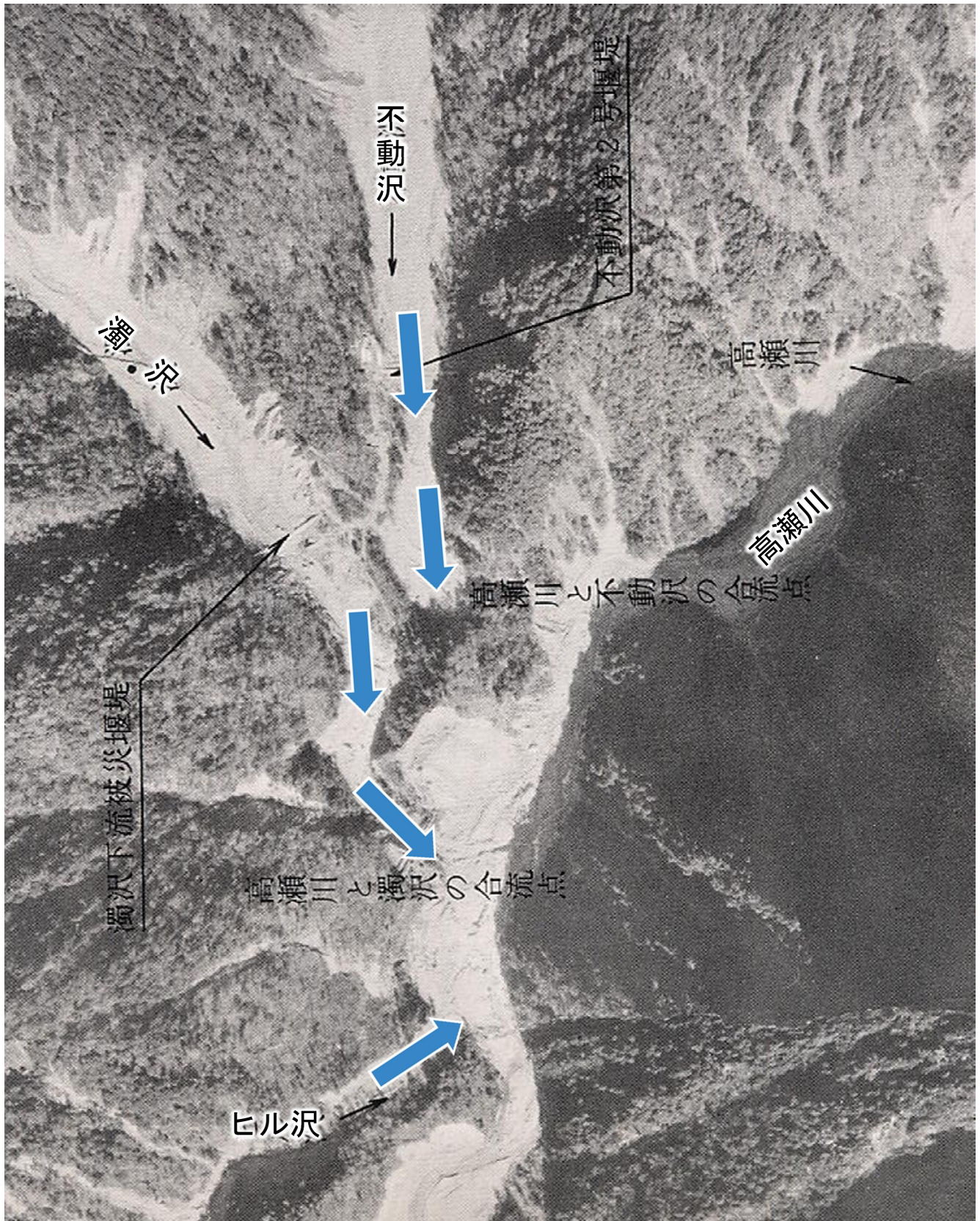


写真 4.13 不動沢・濁沢・ヒル沢と高瀬川合流点の土砂堆積状況
(松本砂防工事事務所, 1969)

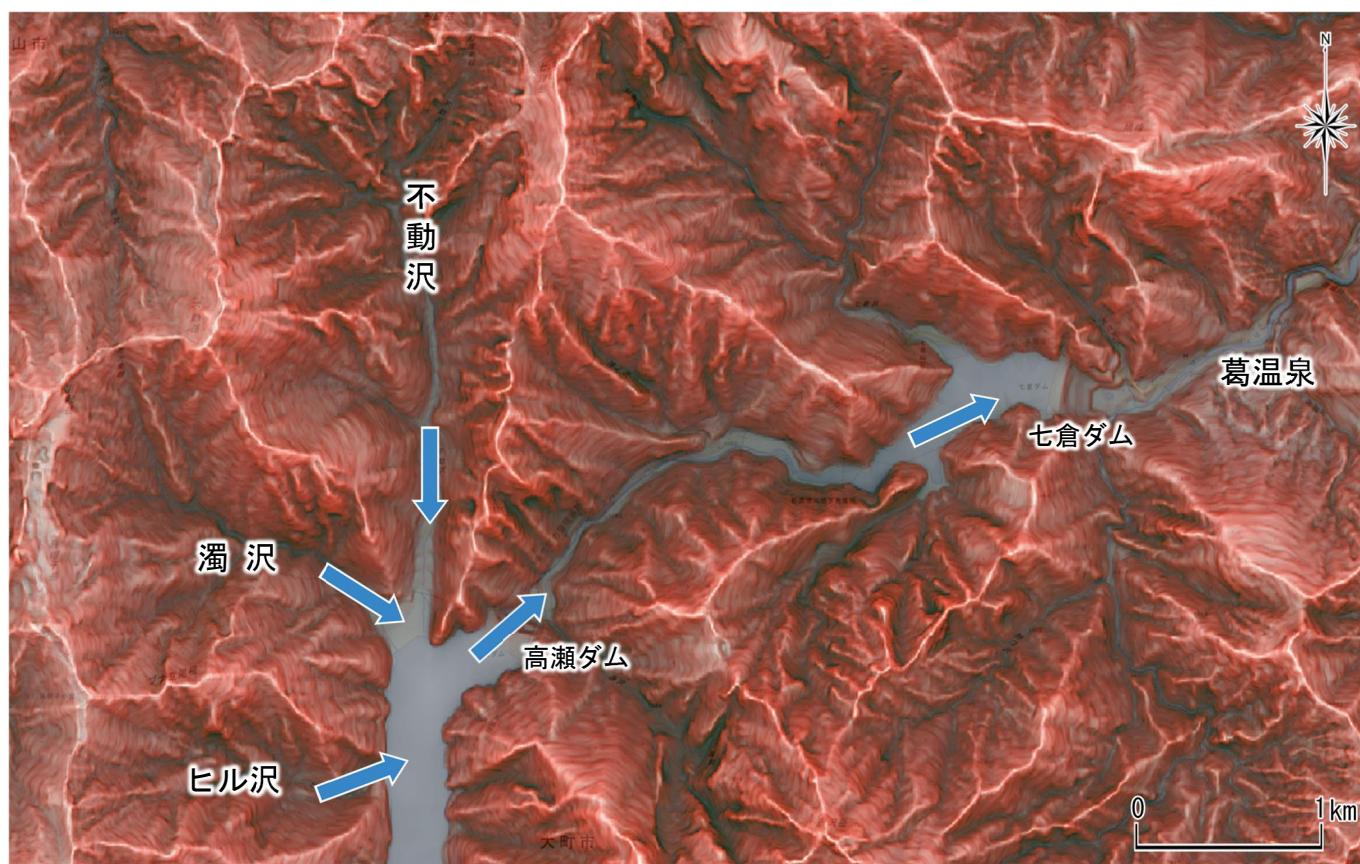


図 4.9 高瀬川の災害状況図

（上）（地理院地図「赤色立体地図」をもとに編集） （下）（地理院地図「標準地図」をもとに編集）

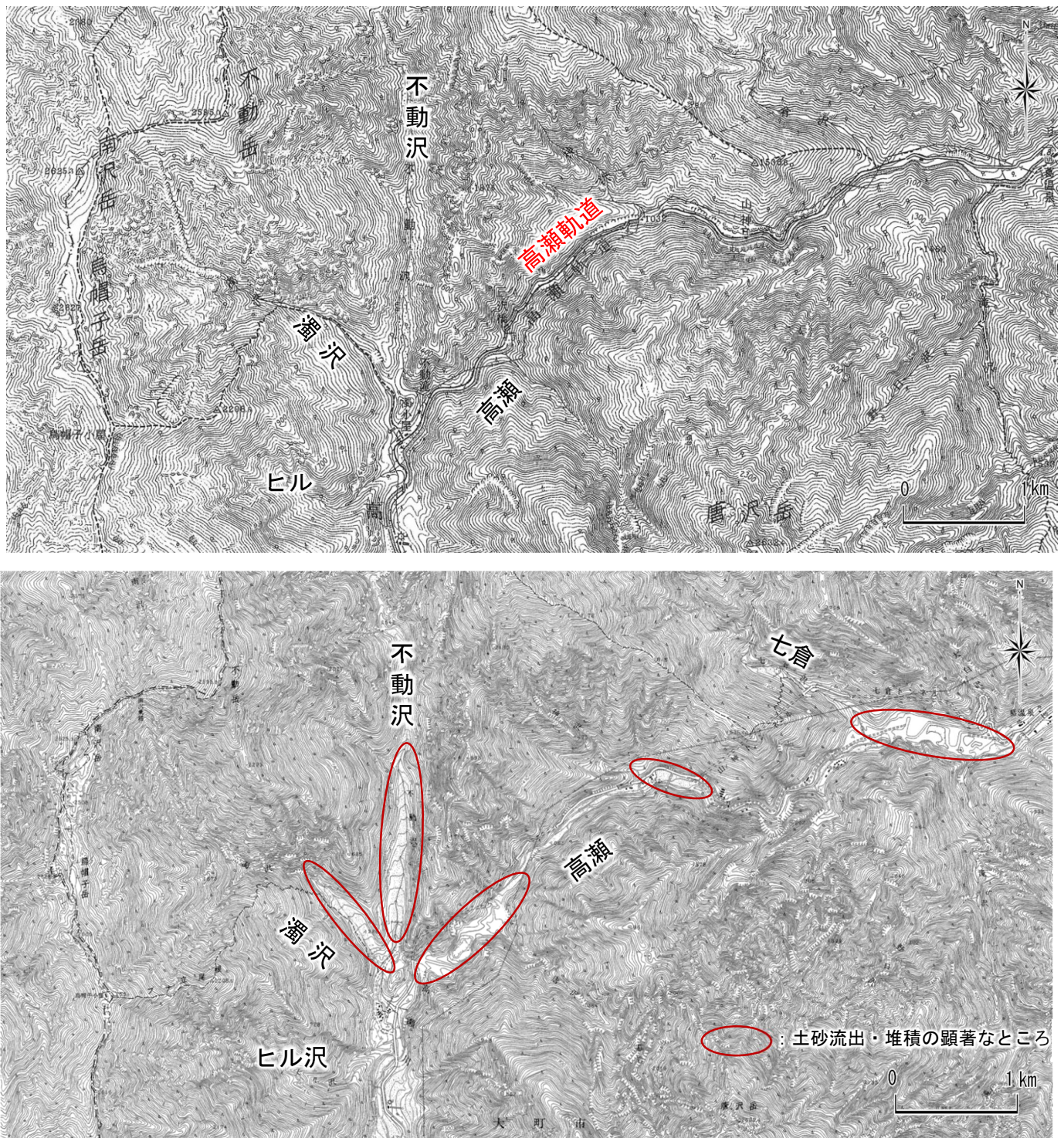


図 4.10 旧版地形図「高瀬川災害」(災害前後)

(災害前：1/50,000 旧版地形図、「槍ヶ岳」昭和 34 年 (1959) 修正測量，昭和 43 年 (1968) 資料修正)

(災害後：1/25,000 旧版地形図「烏帽子岳」，昭和 49 年 (1969) 測量)

※濁沢、不動沢からの土砂流出が特に顕著であったことがわかる。

※高瀬軌道は、大正 12 年 (1923) に大町から笹平まで、大正 14 年 (1925) に第五発電所まで開通したが、昭和 44 年 (1969) 災害で流失し、廃線となった。



写真 4.14 災害前（1967. 5. 25）の葛温泉，
（相模一男氏撮影）



写真 4.15 災害後（1969. 8. 12）の葛温泉，
（相模一男氏撮影）



写真 4.16 葛温泉付近
（松本砂防工事事務所，1969）



写真 4.17 県道槍ヶ岳線の欠壊・仙人閣の下流
100m付近（松本砂防工事事務所，1969）



写真 4.18 濁流に見舞われた葛温泉仙人閣
（松本砂防工事事務所，1971）

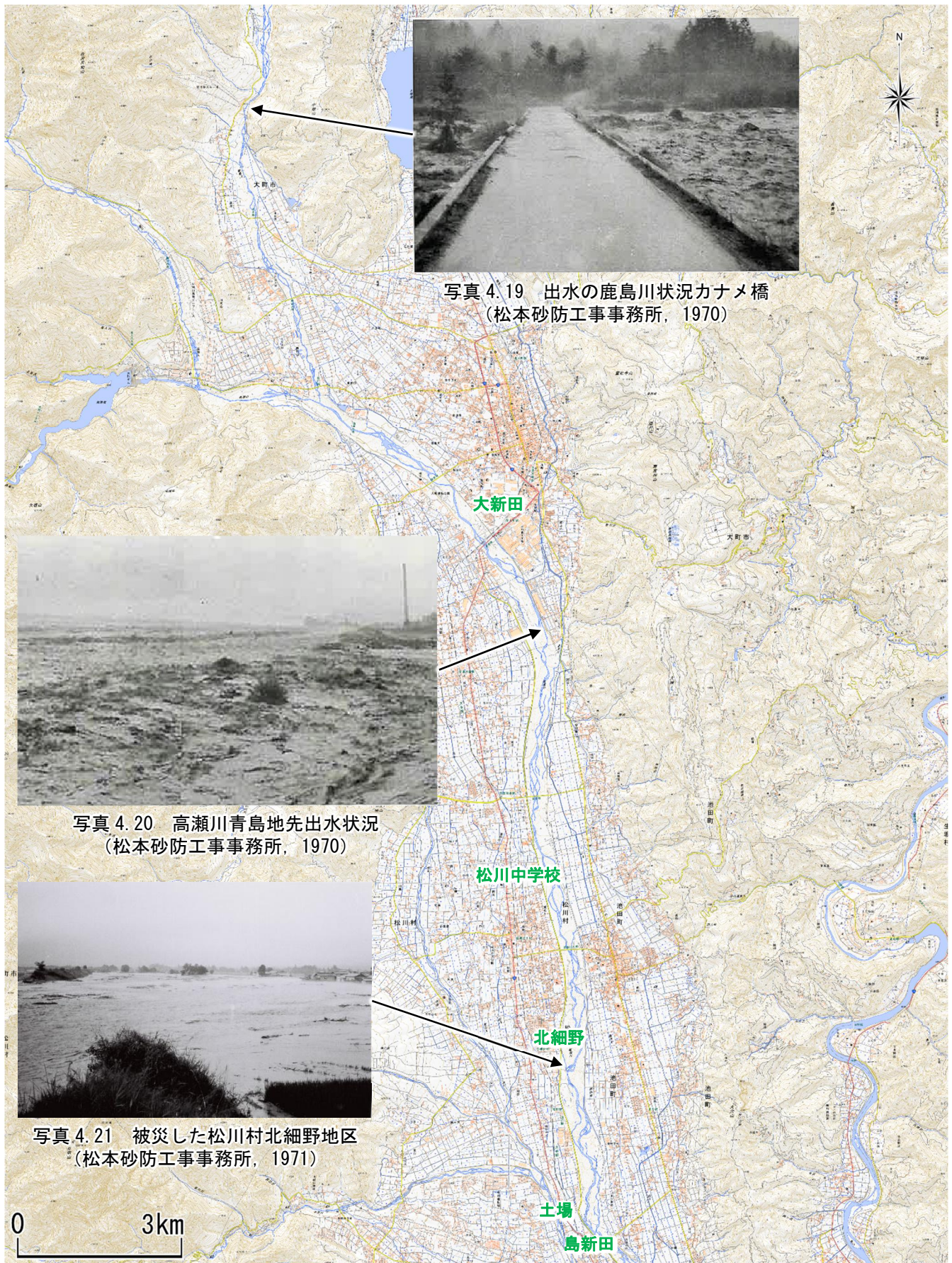


図 4.11 高瀬川下流の主な被災箇所（地理院地図「標準地図」に加筆）

◎ 高瀬川渓谷にある 3 基のダムの話

高瀬川渓谷には、3 基のとても大きなダムがあります。上流から、高瀬ダム、七倉ダム、大町ダムで、連続するように設置されています。ここでは、この 3 基のダムについて解説します。

高瀬ダムは、高さ 176m のロックフィルダム（岩石や砂礫を積み上げてつくるダム）で、昭和 41 年（1966）に着工し、昭和 54 年（1979）に竣工した発電専用のダムです。高さ 176m は、黒部ダムに次ぐ日本第 2 位で、ロックフィルダムとしては日本第 1 位の高さです。

七倉ダムは、高さ 125m、すぐ上流の高瀬ダムと同じロックフィルダムです。着工年も高瀬ダムと同じ昭和 41 年（1966）で、昭和 54 年（1979）に竣工した発電専用のダムです。高瀬ダムと七倉ダムを利用して揚水発電所が建設されました。

また、高瀬ダムと七倉ダムの建設現場は、家族と離れダム建設に情熱を捧げた建設技術者たちを描いた、曾野綾子（1988）の小説『湖水誕生』

の舞台となりました（東京電力リニューアブルパワーHP を参考）。

大町ダムは、3 基のダムの中で一番下流に位置する多目的ダムで、高さ 107m（3 基のダムの中で高さが最も低い大町ダムでも、30 階建てのビルと同じくらいの高さ）の重力式コンクリートダム（強固な岩盤の上にコンクリートで建設し水圧をダムの重さで支えるダム）です。

高瀬川流域では、上流で大雨が降る度に洪水が繰り返されていたため、洪水を防ぐための調査が昭和 42 年（1967）から行われていました。その 2 年後の昭和 44 年（1969）に大災害が発生しました。その後、ダム建設が加速され、昭和 47 年（1972）に着工し、昭和 61（1986）に竣工しました。

高瀬ダムと七倉ダムは、当初は発電専用のダムでしたが、現在はその 2 基にも治水容量を割り当て、大町ダムを併せた 3 基一体で洪水調節の役割を果たしています。



写真 4.22 大町ダムと龍神湖（大町ダム管理所 HP）

※地元の民話「犀龍と泉小太郎の伝説」からダム湖は「龍神湖」と名付けられている。